

## 道路12 四国新道(讃岐新道)(香川県)

資料名	ストック効果に関する記述
仲南町誌編集委員会編「仲南町誌」(仲南町、1982年)、980-981頁	讃岐新道 (中略)讃岐新道は、明治二〇年(一八八七)から明治二一年(一八八八)にかけて多度津～猪の鼻間の讃岐分がほぼ完工し、人や馬車の通行ができるようになった。
仲南町誌編集委員会編「仲南町誌 続編」(仲南町、2006年)、226頁	四国新道 四国新道の完成により香川・徳島間の物流は大きく変わり、米や麦、塩そして葉タバコなどの産品が行き交い、中継点に当たる猪の鼻峠には飲食店や旅館、運送屋が軒を連ねて、大正八年には三豊自動車会社が峠を越えて琴平・池田間の乗合自動車を開業している。
新修財田町誌編纂委員会編「新修 財田町誌」(財田町、1992年)、681-682頁	四国新道 大久保謙之丞が計画した四国新道(四国四県を結ぶVロード)は、その後の四国の発展に大きく寄与した。  新道開通と戸川の宿場 明治二七(一八九四)年五月、四国新道の開通によって高知・徳島・香川の物資の交流や人々の往来が盛んになり、戸川は交通の要所となり峠の街は一変した。 旅館六軒(旅館名省略) 運送店二軒(店名省略) 水車一〇軒(水車名省略) その他、戸川をにぎわしたもの(産米移出検査所、人力車四〇台常駐、乗合馬車、郵便取扱所)
観音寺市誌増補改訂版編集委員会編「観音寺市誌 通史編」(観音寺市、1985年)、388頁	四国新道 (中略)この恩恵は当市にも多く、市の物産や人は徳島・高知との流通が容易となり、市の商業圏が著しく拡大された。
四国の建設のあゆみ編纂委員会編「四国の建設のあゆみ」(四国建設弘済会、1990年)、371頁	讃岐新道 (中略) 明治二十七年五月、四国新道は全線が開通し、高知・徳島・香川の交通が盛んとなり、街道筋に家が建ち並ぶようになったが、……
大倉一夫「備讃の海に橋を架けよ」(財田町役場、1988年)、115-116頁	四国新道のもたらした開発効果 「財田町史」には、新道開通によって沿道の財田上村の変化を記述している。 「明治二七年(一八九四年)五月、四国新道が全線開通するや高知、徳島、香川の物流が盛んになった。本州からの交易も行なわれ、人々の往来が激しくなって、道の両側には家が建ち並んだ。……」 謙之丞の生地戸川には旅館が六軒建ち並び、運送業者が二業者、水車利用による精米業者が九業者開業し、明治四〇年代には一日平均七〇台の牛・馬車が猪ノ鼻峠を越えて阿波に米、大豆、塩、生魚、粉類、肥料などを輸送したといわれている。 明治三〇年代の馬車時代(香川県では三一年に乗合馬車取締規則が公布された)にはいと、讃岐新道には乗合馬車が走り、善通寺の師団へ行く人、金刀比羅参りの人たちが利用した。

## 道路12 四国新道(讃岐新道)(香川県)

資料名	ストック効果に関する記述
大倉一夫「備讃の海に橋を架けよ」(財田町役場、1988年)、116頁	<p>鉄道建設の誘発 (中略)            謚之丞の交通基盤整備による地域開発の構想は、四国新道を開削することによって多くの人びとを啓発した。四国における鉄道の建設も、四国新道開削が大きな影響を及ぼしている。</p>
土木学会四国支部編「四国に豊かさと潤いをもたらした土木事業」(四国建設弘済会、1995年)、41頁	<p>四国新道(猪ノ鼻峠) (中略)明治二十七年に、瀬戸大橋、香川用水など大規模な構想を提唱した明治の先覚者大久保謚之丞(香川県議、三豊郡財田町出身)の努力により大久保新道が開通してからは、この新しい峠が、阿波と讃岐を結ぶ商い道となり、その一部が、現在の一般国道三二号となっている。峠には、借耕牛のほか、人力車や荷馬車も通るようになり、また、街道には、何軒かの茶店やはたごも建ち、行商たちで大いに賑わった。</p>